

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24530139

研究課題名(和文) 初期近代ブリテンにおける「文明の帝国」の研究

研究課題名(英文) Civility and Empire in the early modern Britain

研究代表者

木村 俊道 (KIMURA, Toshimichi)

九州大学・法学(政治学)研究科(研究院)・教授

研究者番号：80305408

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究においては、「文明の帝国」の観点から、イングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランド、アメリカ植民地などから構成される、16世紀から18世紀にかけての、初期近代ブリテンの政治思想史の一端を明らかにした。それにより、多元的・複合的君主国としてのブリテンにおける、「文明」(シヴィリティ)や「帝国」、「征服」や「植民」などをめぐる、政治的言説の歴史的な展開が新たに明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This research explored one aspect of the history of British political thought. The early modern Britain (16c-18c) was composed by England, Scotland, Wales, Ireland, American colonies, and so on. This research made clear the historical development of political discourses of civility, empire, conquest, and colony in such a multiple and composite monarchy.

研究分野：西洋政治思想史

キーワード：ブリテン 文明 帝国 初期近代

### 1. 研究開始当初の背景

今世紀に入ってからとくに、グローバル化やEU統合を契機として、従来の「主権国家」や「国民国家」の見直しが進み、それとともに、「帝国」や「文明」の意義を問う議論も活発に行われるようになった。

もっとも、これらの議論は主に、9.11以降の国際情勢分析や理論研究などの分野で行われたが、「帝国」や「文明」の概念はもっぱら、西洋中心主義的なイデオロギーの産物として批判されてきた。他方で、歴史研究においても、19世紀以降の、とりわけ大英帝国の研究が盛んに行なわれる一方、それ以前の、初期近代(近世)の時代には十分な注目がなされてこなかった。

以上の研究動向を一つの大きな背景として、研究代表者はこれまで、ポーコックやアーミテージらの先行研究を手掛かりとしながら、政治思想史の観点から、初期近代ブリテンにおける「文明」(=シヴィリティ)や「帝国」の見直しに着手し、それらの系譜を追跡してきた。

ところが、研究代表者の研究は、「ブリテン」を対象としながらも、「イングランド」をめぐる政治的な言説の展開を中心になされていた。それはまた、「文明」と「帝国」をめぐる語彙群の通時的な展開を別個に検討したものであったため、両者の共時的な関連は深く考察されないままであった。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、これまでの研究成果を踏まえながら、それらを統合し、新たに「文明の帝国」という観点から、16世紀から18世紀にかけての初期近代ブリテン政治思想史の特質を解明することにある。

本研究ではまた、イングランドに加え、スコットランド、アイルランド、アメリカ植民地などの「ブリテン」を構成する諸地域にも視線を拡大し、「文明」と「帝国」に加え、「征服」や「植民」などをめぐる、複合国家「ブリテン」を舞台とした多様な議論の展開に着目する。

これらの作業を通じて、従来の「主権国家」や「国民国家」、あるいはアメリカ独立以降の「大英帝国」(第2次帝国)とは異なる、複合的・多元的国家としての「文明の帝国」(第1次帝国)を支えた政治的な言説や、その思想的な意義を明らかにする。

### 3. 研究の方法

本研究においては、「帝国」や「文明」をめぐる議論の思想史的な展開を、その共時的な関連に着目して明らかにするとともに、イングランドに加え、スコットランド、アイルランド、アメリカ植民地といった地域を単位

にして再構成する。

また、本研究の主な資料となる初期近代ブリテンの文献については、とくに Early English (マイクロフィルムもしくはデータベース)などが本学(九州大学)に所蔵されていないため、東京大学や早稲田大学などの国内の他大学や、海外のケンブリッジ大学やオックスフォード大学ボードリアン図書館などで調査・収集を行った。

### 4. 研究成果

平成24年度から27年度にかけて、本研究の成果の一部は、6件の学会・研究会での報告、2件の雑誌論文、4件の図書(単著1件、共著3件)その他の書評や論評などにおいて、それぞれ発表された。

単著の『文明と教養の〈政治〉 近代デモクラシー以前の政治思想』(図書)および論文「初期近代イングランドにおける会話・交際・社交」(雑誌論文)では、他者との会話や交際を可能にする「文明」(=シヴィリティ)の概念の歴史的・通時的な展開が、改めてまとめられた。それらはまた、政治思想学会での報告(学会発表)に加え、「政治のアルス デモクラシー以前の「文明」と「教養」」(その他)、「失われた「政治の技術」」(その他)を通じて、広く一般向けにも発表された。なお、前掲『文明と教養の〈政治〉』は、読売新聞(2013年12月1日朝刊)や『政治研究』第60号(2014年)に書評が掲載されるなど、一定の反響を得た。

これらを踏まえ、一橋大学哲学・社会思想学会での報告「宮廷と帝国 初期近代ブリテンにおける「公共性」の原像」(学会発表)ではさらに、「文明」と「帝国」との思想史的な連関が指摘された。ここではとくに、宮廷で培われた作法としてのシヴィリティの概念が、他方で、イングランドによる他国や植民地の支配を正当化する帝国論のなかでも活用されていたことが明らかとなった。

また、『政治概念の歴史的展開』第7巻(図書)所収の「外交」では、この多義的なシヴィリティの概念が、ブリテンを含むヨーロッパの国際関係の成立に不可欠な前提条件であったことが示された。さらに、『イギリス哲学研究』第37号に掲載された「書評: Markku Peltonen, *Rhetoric, Politics and Popularity in Pre-Revolutionary England*」(その他)は、シヴィリティと人文主義、とりわけレトリックとの関連を考察する機会となった。

他方で、ブリテンを含む当時のヨーロッパにおける諸国家が、現代の国民国家とは異なる複合的・多元的国家であったことの重要性は、研究期間内に収集した諸々の関連文献に

加え、『イギリス哲学研究』第 38 号所収の「書評：J・G・A・ポーコック（犬塚元監訳）『島々の発見 新しい「ブリテン史」と政治思想』」（その他）などを通じて確認された。

そのうえで、スコットランドの議論に関しては、とくにスコットランド国王ジェームズ 6 世の『バシリコン・ドロン』や、イングランド王時代の議会演説などを対象として、「文明の帝国」をめぐる議論の展開が検討された。その成果の一部は、『岩波講座政治哲学』第 2 巻（図書）所収の論文「君主主義の政治学 初期近代ブリテンにおける「文明」と「政治」」において発表された。この論文ではまた、ベイコンやジョン・ロック、あるいはクラレンドン、ハリファックス、ニューカースルといった顧問官の議論を取り上げ、複合的な君主国としてのブリテンを支えた政治学の再生産の過程を明らかにした。ジェームズの政治思想についてはさらに、『イギリス哲学研究』第 39 号所収の「書評：小林麻衣子『近世スコットランドの王権 ジェームズ六世と「君主の鑑」』」（その他）などを通じて理解が深められた。

なかでも、期間内に研究が進んだのが、ルネサンス期のアイルランドの政治思想である。とくに、『法政研究』82 巻 2・3 号に掲載された「征服とシヴィリティ ルネサンス期のアイルランド統治論」（雑誌論文）は、ホリンシェッド『年代記』やトマス・スミス、リチャード・ビーコン、エドモンド・スペンサーらの議論を素材として、同時代のアイルランド統治をめぐる展開された「征服」論や「植民」論、そして「文明」論と「帝国」論の密接なつながりを明らかにした。この研究成果は、九州大学政治研究会における同タイトルの報告（学会発表）および、日本イギリス哲学会での報告「征服・植民・複合国家 初期近代アイルランドの経験と記憶」（学会発表）においても報告された。

さらに、このような「文明の帝国」論は、古典古代やマキアヴェッリに由来する、同時代における人文主義の言説に立脚していた。このことは、以上の諸研究に加え、「政治思想学会会報」第 41 号に掲載された「ホップズのローマ、もしくは人文主義と帝国 Daniela Coli, Hobbes, Roma e Machiavelli nell'Inghilterra degli Stuart をめぐって」（その他）においても明らかにされた。この原稿は、フィレンツェ大学のコーリ氏を迎えて開催された関西大学法学研究所第 50 回シンポジウムでの英文コメント「Comment on Daniela Coli 'Hobbes's Rome: Between Tacitus and Machiavelli」を基にしたものである。

もっとも、平成 27 年度までの研究期間内

では、アメリカ植民をめぐる議論など、未だ研究成果の公開に至っていないものも多い。とはいえ、本研究においては、「文明の帝国」の観点から、イングランドやスコットランド、アイルランドなどを舞台とした、複合的なブリテン帝国の政治思想を叙述することの重要性や必要性、そして可能性が明らかとなった。

このように、従来のような主権国家や国民国家、あるいはイングランド中心的な視点を前提にするのではなく、初期近代「ブリテン」の政治思想史を総合的に描く試みは国内ではまだ少なく、図書や論文、学会発表などを通じて一定のインパクトを有したと考えられる。とくに「文明」と「帝国」の関連に着目した点は、海外の研究を含めても独自性が高いと考えられる。

なお、同様の観点から、マキアヴェッリをはじめ、ホップズやロック、そしてジェームズ 1 世（6 世）などの政治思想を再検討することの必要も見出された。さらに、本研究の副産物として、『政治概念の歴史的展開』第 6 巻所収の論文「君主制」（図書）などに見られるように、ブリテン政治思想の特質を理解するうえで、「文明」と「帝国」をつなぐ結節点としての「君主」の役割が重要であることが新たに判明した。これらについてさらに研究を進めることが今後の課題である。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 2 件)

木村俊道、征服とシヴィリティ ルネサンス期のアイルランド統治論、法政研究、査読なし、82 巻 2・3 号、2015、pp. 333-361

木村俊道、初期近代イングランドにおける会話・交際・社交、政治思想研究、査読なし、第 13 号、2013、pp. 72-103

〔学会発表〕(計 6 件)

木村俊道、征服・植民・複合国家 初期近代アイルランドの経験と記憶、日本イギリス哲学会、2016.3.29、学習院大学(東京都豊島区)

Toshimichi Kimura, Comment on Daniela Coli 'Hobbes's Rome: Between Tacitus and Machiavelli', 関西大学法学研究所第 50 回シンポジウム、2015.9.26、関西大学(大阪府吹田市)

木村俊道、征服とシヴィリティ ルネサンス期のアイルランド統治論、九州大学政治研究会、2015.6.20、九州大学（福岡市東区）

木村俊道、宮廷と帝国 初期近代ブリテンにおける「公共性」の原像、一橋大学哲学・社会思想学会、2014.12.6、一橋大学（東京都国立市）

木村俊道、「君主制」概念の歴史的展開、九州大学政治研究会、2012.11.17、九州大学（福岡市東区）

木村俊道、初期近代イングランドにおける会話・交際・社交、政治思想学会、2012.05.26、慶應義塾大学（東京都港区）

#### 〔図書〕（計 4 件）

木村俊道、晃洋書房、政治概念の歴史的展開第7巻、2015、pp. 23-42

木村俊道、岩波書店、岩波講座政治哲学第2巻、2014、pp. 3-25

木村俊道、晃洋書房、政治概念の歴史的展開第6巻、2013、pp. 76-93

木村俊道、講談社、文明と教養の＜政治＞ 近代デモクラシー以前の政治思想、2013、260

#### 〔その他〕

ホームページ等

木村俊道、書評：小林麻衣子『近世スコットランドの王権 ジェイムズ六世と「君主の鑑」』、イギリス哲学研究、第39号、2016、pp. 88-89頁

木村俊道、ホップズのローマ、もしくは人文主義と帝国 Daniela Coli, Hobbes, Roma e Machiavelli nell'Inghilterra degli Stuart をめぐって、政治思想学会会報、第41号、2015、pp. 7-12

木村俊道、書評：J・G・A・ポーコック（犬塚元監訳）『島々の発見 新しい「ブリテン史」と政治思想』、イギリス哲学研究、第38号、2015、pp. 77-78

木村俊道、書評：Markku Peltonen, *Rhetoric, Politics and Popularity in Pre-Revolutionary England*, イギリス哲学研究、第37号、2014、pp. 149-150

木村俊道、政治のアルス デモクラシー以前の「文明」と「教養」、SYNODOS, vol. 142、2014

<http://synodos.jp/a-synodos>

木村俊道、失われた「政治の技術」、『本』2013年11月号、2013、pp. 52-53

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

木村 俊道 (KIMURA Toshimichi)  
九州大学大学院・法学研究院・教授  
研究者番号：80305408